

平成25年度西宮文学案内
秋講座 第2回「厄神文楽～文楽人形による人形供養」

日時：2013年11月13日（水）14時～15時00分

場所：関西学院西宮聖和キャンパス

講師：文化プロデューサー 河内 厚郎 氏

関西学院大学教授 中村 哲 氏

河内 関西学院大学の聖和キャンパスは、ご存知のように、以前は聖和大学でした。関西学院大学と合併して教育学部になりましたが、このシリーズでは、いろんなキャンパスや名建築を会場として使っていきたいのです。ちなみに、市民グラウンドの南側、175号線沿いに、今はファミレスになっていますが、私の通った聖和大学付属幼稚園がありました。

再来週、芸術文化センターの中ホールでおこなう「能楽と文学のコラボ」は画期的な催しといってよいものです。能の『船弁慶』は、尼崎の^{だいもつ}大物が舞台です。大物主神社のあたりまで平安時代は海で、義経・弁慶の一行が頼朝に追われて隠れたとされる場所に碑が立っています。一行が船出して沖へ出ると、にわか嵐がおこって西へ流される。謡曲『船弁慶』では平知盛の亡霊が現れますが、浄瑠璃では『義経千本桜』大物浦の段となっており平知盛が生きていて船宿の主人になっているという設定です。

古事記・日本書紀の時代、神功皇后が、海外遠征から還って難波に上陸しようとする時、風が吹いて、今の東灘区の住吉の浜に打ち揚げられた。元住吉神社です。御影もその故事にゆかりの地名で、もう一度そこから船出して大阪の住吉へ着く前に甲を埋めたというのが西宮の甲山伝説です。尼崎・西宮の沖で、にわか嵐がおこるとするのは六甲おろしのこと、詞章には「武庫山おろし」とあります。武庫山おろしというのは、タイガースゆかりの六甲おろしのことです。

科学の発達していなかった昔は自然現象の謎がわかりませんから、武庫山おろしが吹いてくるという『船弁慶』と『義経千本桜』に共通する素材に着目して、能楽と文楽のコラボを仕掛けました。文楽は芦屋在住の吉田和生さん、能は西宮在住の観世流シテ方梅若基徳さんに出させていただきます。途中の間狂言には、阪神間を本拠に活躍されている善竹隆司さんが出演します。コラボレーションと言っても、単に半分ずつくっつけてもだめなので、そんな単純なものではない。ある程度どちらかに収束せざるを得ない。今回、音楽は謡曲でいきます。義太夫は出てきません。役者は人形と人間とが出ます。

文楽は三味線の伴奏で義太夫を語りますが、実は三味線というのは外国から入ってきたものです。永禄年間、信長が活躍し始めた1560年代くらいに琉球から堺に入ってきたとされていますが、詳しくはわかりません。中国や沖縄ではピックのようなものではじいていたようですが、三味線のもとになる楽器が大阪に入ってきたとき、爪弾くものを忘れてきたのか、琵琶法師のようにバチでたたくようになりました。いわゆる弦楽器の演奏の仕方

とはちょっと違って、半分は打楽器的な演奏です。それにより浄瑠璃は新しい命を得て義太夫節などがうまれてきました。文楽の源流とされる西宮の人形芝居がいつ始まったのか、はっきりわかりませんが、日本で最も古い本流のようです。それが淡路の人形芝居に継承され、大阪の文楽に繋がっていく。残っている文献としていちばん古いのは、秀吉の時代に書かれた「御湯殿上日記」です。「能の如し」と賞めています。西宮神社に仕えた西宮の傀儡師が首から箱をぶら下げ人形を遣って諸国を行脚し、恵比寿さんのお札を配って恵比寿信仰を広めました。清元の歌舞伎の踊りで『傀儡師』があります。坂東三津五郎がよくやっています。

文献に「能の如し」とあるのは、能のように幽玄味があるとか格調高いとかいろいろ考えられますけど、謡曲でドラマが進行した可能性もあります。今回、謡曲にあわせて人形に出させていただきます。西宮の人形芝居の原形に一番近いものを実験的にやってみます。と、いいましても、その当時よりも遥かに進んだ、洗練された人形の技術でやりますので、単に昔に戻ってやるわけではないのですが、西宮の人形芝居がどんなものだったかを考える手がかりにはなります。

能では冥界から平知盛の亡霊が仕返しをしようと出てくるのですが、浄瑠璃「義経千本桜」では平知盛が大物で船宿を経営しており、そこの一人娘が実は安徳天皇ということになっていまして、平清盛が自分の孫を天皇にしたいために、女の子に生まれた孫を無理やり男に似せたという無茶苦茶な話で、最後に船宿の亭主に化けていた平知盛が大物の浦に沈んで行く。能に着想を得てはいても、人形浄瑠璃のほうは、もっと世俗的な設定にしています。

出演者は皆、阪神間在住の方々ばかりです。一部のトークには、『船弁慶』の舞台になりました、尼崎の大物主神社の宮司さんに出て頂きます。

もう一人の講師の方をお呼びします。関西学院教育学部教授で、和文化教育学会を主催しておられる中村哲先生です。

中村 最初に和文化教育学会ですが、お手元にパンフレットを用意させていただいておりますが、和文化教育学会の方針、活動内容を書いております。きっかけは、今日ご出席の方々、年齢的にはかなりで60歳を超えておられます。私も60歳をこえていますので同世代です。実は学校教育の中で我々の世代というのは、戦後教育を受けてきたのですが、そこで学ぶ内容は、どうしても自国の文化よりも他国の文化で、例えば美術を習うなら西洋美術が主でした。日本の美術、日本の邦楽を勉強するとか、そういう機会が戦後教育の中では抜け落ちていた。それはある意図があったのです。しかし、日本が政治、経済的に国として国際的に重要な役割を果たしてきた段階で、自国のことをきちっと理解する必要があるのではないか。そういう考え方で、日本のこれまでの伝統文化を含めて、文化を大切に教育のあり方を学校の中に生み出そうと思いついて「和文化の風を学校に」という活動フレーズで、平成17年から活動を始めた次第です。そしてその呼びかけの一人に、河内厚郎さんにも入ってもらっているのです。河内先生と私のつながりは、関西スクエアと

いう朝日新聞の会がありまして、関西地域でこういう文化的な活動を起こす際には人脈と活動を展開していくためにぜひ参画してほしいと河内さんをお願いしました。そして当時、日本国際文化研究文化センターの山折哲夫先生にもご協力いただき、そして現会長の梶田叡一先生、先生は日本の学校の教育の中教審において日本の学校教育のあり方を先導的に指導されている方なのです。そういう方々のご協力を得て、平成17年度に会を起こしたのです。そこでの考え方は日本の生活地域、伝統の文化領域をきちんと理解させる教育を受けることを通して、日本のよさを理解するだけではなく、いろんな国々との文化交流をも視野に入れた活動を展開していくことにあります。和文化の「和」は平和と調和の和も込めて展開しています。活動内容としては、パンフレットにありますように、教育的な研究であっても、和文化自体の素晴らしさに触れる、そういう風な教育によって児童、生徒の素晴らしい成長の事実直面する。それから和文化の継承発展を支える技術、技能を獲得できる。さらに教育研究を進める。このようなことを柱に研究している団体です。

活動団体の特色としては、日本の文化的な係わりを持っている方々と、教育的な係わりを持っている方々、そういうことに興味を持っている一般の市民の方々の多くの人たちの支えによって、活動を展開している次第です。

河内 関西学院というミッション系の大学に和文化教育学会があるというのは面白い組合せですが、これは別に問題なかったのですか。

中村 全然問題ありません。和文化の和というのは、日本の文化というだけではなく、日本も外国も含めて文化的な関わりを重視しているという意味です。関西学院大学は、まさしくグローバル人材育成を掲げて、世界において、活躍できる人材形成を意図しています。私が昨年度ここに赴任することになったのは関西学院大学に教育学部が設立されたからです。

河内 その前は兵庫教育大学におられたのですね。

中村 兵庫教育大学にいました。私は高校時代に、関西学院大学の文学部を受けたのですが、ところが大学の方から不合格の知らせが来て、高校からもうずーと関学へ来たこともなかったのですが、不思議な因縁で、昨年度からここで仕事させていただいています。

河内 奇縁ですね。中村先生は文化面での御専門は剣道家で、今もなさっているのですか。

中村 剣道家というのではなくて、要するに、和文化が重要だと思ったきっかけの一つは、私自身は、中学校時代から中学の恩師の影響を受けて、武道のかかわりをずっと続けてきたわけです。中学校時代は、恩師が岡山大学を出られて神戸市の飛松中学校という、当時神戸市で一番大きな学校でした。私らの学年が一クラス55名で19クラスもあり、上が22クラスで、下が16クラスで、団塊の世代で人数が多い。そういう学校で先生が授業と同時に柔術、岡山では竹之内流という日本の武術の源流があるのですが、その柔術をやっていたのをみて、その先生にあこがれて、先生に教えてもらえないかとお申し柔術を習いました。高校時代は剣道をし腰を悪くしまして、大学に入ってから居合道をずっと続けています。武道を通じて、何が人間形成に重要なのかと考えてみた場合、学校の授業

でいろんな影響を受けて自分の人間形成に本当に影響を受けたのかということを考えると、そういう武道を通して心技体のかかわりを修練していくなかに自分自身の人格の形成の核があったのではないか。そういう風なかわりは実は武術だけでなく、日本文化の茶道にしる、邦楽にしる、いろんなことに共通しますし、私達自身の生き方の中においても、心と体がバランスよく保たれば生活も充実する。そういう意味で心技体の重要性は、日本の文化、地域の文化に共通する一つのきっかけとなりました。

河内 関学の時計台のところに、来年、総合博物館がオープンします。今年の連休に、時計台の前に鯉のぼりが翻りました。これは中村先生の仕掛けですね。

中村 鯉のぼりは日本の伝統行事で、子供達のすこやかな成長を祈って子どもの日に上げる、昔は家でも上げていたところがあるかと思うんですが。そういう伝統的な行事の一つです。実はそういう鯉のぼりというのは、例えば阪神淡路大震災とか東北の東日本大震災の時にでも、当時の人々が非常に苦しんでいる3月、5月になった時に、これから立ち上がろうじゃないかというときに、人々の気持ちを奮い立たせる、子ども達の元気を引き出す意味で、社会的な状況の場においてあちらこちらに鯉のぼりがあげられています。西宮もあがっている。夙川のところにもあります。六湛寺川にも鯉のぼりがあがっている。阪神淡路大震災の時からずっとつながっている。実は鯉のぼりは鯉が川をさかのぼり、龍になったという故事から人間の力強い生き方を象徴しているものです。そういう意味で、私自身はその活動を伝統的な行事だけでなく、社会的な危機状況のなかでも、人々は一つの力を見出すシンボルと、同時にそういうような社会的な状況だけでなく、やはり世界中のいろんな人々、国々になんらかの形で生きる力を引き出すような、そういうシンボルとして鯉のぼりは意義があるのではないか。グローバル文化のシンボルとしての鯉のぼり、そういう位置づけで関学に上げたわけです。実はそういう行為を何も私がやっているのではない。10年前から、フランスのパリの日仏文化センターの館長さん服部祐子さんという方が、フランスのワイン経営者の方とご結婚されて、ずっとフランスに在住されていたのです。お子様が生まれたときに、フランスの文化、日本の文化のよさを知ってもらおうと同時に交流を推進しようと、私財を投じてパリにセンターを作られて、その活動の一環として世界のこどもの日を作ろうと。そういうような主張でユネスコと協力してパリに10年間ずっと鯉のぼりを上げていたのです。それを踏まえて関学も文化のシンボルとして5月に上げました。来年も上げたいと思っています。

河内 三田に有馬富士公園という県立公園があり、動く彫刻、風車のアートで有名な新宮晋さんの新作お披露目会が先日ありました。関西学院の図書館のところにも新宮さんの大きな作品があります。風がないと思われるような日でも動いていて、実は風があるとわかるのですね。銀座、ルーブルの中庭、世界中あらゆるところに新宮作品がありますが、三田にアトリエがあります。三田駅を降りますと、駅前にあの方の作品の風車があって、必ず自然の風力で廻っています。自然を加工するのではなく、合気道みたいに自然の力を使うというか。あれは鯉のぼりにつながるのではないのでしょうか。

教師の先生方に日本の文化をもっと知ってもらおうということですが、子どもに教えるのに知識、技量等、苦慮なさっていると思います。反応はどうでしょうか。

中村 学ぶ機会がなければ、なかなか文化的よさを知る機会は少ないし、今の子供達の親御さんはそれほど文化的なものを理解しているかという、必ずしも多くないと思いますので難しいところがあります。そのような取り組みを推進させて行くためには、学校教育のカリキュラムを改革する必要があります。その改革のきっかけになったのが、第1次安倍内閣です。平成18年の教育基本法改定の中で伝統文化を尊重していくと明記されたのです。それを受けて平成20年に小・中・高のカリキュラムの方向性を示す指導要領が発表された。その大きな柱に伝統文化を重視すると明記された。新しい指導要領が小学校では23年に、中学校では24年に、高校は今年度から教科書が新しくなった。各教科の中身に伝統文化的な扱いがきちんと出てきている。それに先行して音楽の内容では和楽を聴かせるという授業も入ってきており、学校の中で徐々に文化的なよさを子供達に理解し体験していくという流れが出てきている。

河内 明治以来の学校教育を振り返って見ますと、美術では西洋画が盛んになったといっても日本画はもちろん残りますし、文学も日本文学は当然あるわけで、西洋文学を翻訳するのも日本語です。音楽教育だけが完全に西洋化してしまいました。学校で三味線を習うとかはなかったわけです。理由は軍隊の、歩兵の養成でした。明治の初めに国民皆兵制度で成人男子は兵隊になったわけですが、当時は圧倒的に農民が多く、農作業の身体動作と兵隊の動作が合わないのです。例えば行進が出来ない。右手と右足が同時に出ているのが従来の日本人でしたから、これでは速く進めない。ヨーロッパへスエーデン体操やデンマーク体操とかを視察に行き、あるいはドイツの軍楽隊などを見ると、右と左が逆に出る。日本のチントンジャンの音楽では行進できません。マーチでないと行軍できない。それで音楽が西洋音楽一辺倒になってしまった。音楽は情緒面で大きな影響力を持ちます。

沖縄にはそうした音楽教育がいかなかった。本土のように西洋音楽一辺倒ではなかったので、沖縄から出てくるミュージシャンは独特のリズム感を持っている。そういう意味で、われわれ本土の人間は、本当に湧き出てくるものがない。古代に雅楽が入ってきた時もそうでした。今年2013年ですが、1400年前の西暦613年に何があったか、皆さんご存知でしょうか。日本で始めて国道（官道）が難波から飛鳥まで通った年です。1400年祭を南大阪の方でやっております。後に竹之内街道と呼ばれることになりました。堺の仁徳稜の方から二上山のほうに行く道です。その前年の612年には推古天皇のときに雅楽が入ってきました。海外の楽器が本格的に入ってきました。聖徳太子が人間の心を和らげようとして招いたらしいのですが。しかし、これは上から入ってきた音楽で、民衆の中から湧き出てきたものでない。上流階級のセレモニー用の儀典的な音楽です。それが、平安末期から鎌倉にかけて民衆音楽が出てきて、一遍上人の踊り念仏とか、それから観阿弥・世阿弥が登場してきて、狂言も出てくる。戦国時代に三味線が入ってきたけれども、うまく使いこなして成熟したところに、西洋音楽を強引に入れてしまったわけです。日本人の身体動作は

改造されてしまいました。それでも、陸上の末次選手が右手と右足を一緒に出す「なんば」という走り方を復活させました。相撲の、はずおしと一緒にです。歌舞伎では馬までなんばで走るのです。大地に根を下ろした走り方が、末次さんのようにどこかにまだ日本の身体文化として残っており、全くなくなってはいないようです。

日本の洋風文化も、もう一種の和文化でしょう。来年は宝塚歌劇が 100 周年です。舶来の三味線も 100 年たったら義太夫節として成熟したように、西洋音楽も 100 年たてば日本の芸能の一種だと、来年ぐらいから宝塚歌劇も言ってよいでしょう。和洋の文化を折衷してきた阪神間に多い、このヴォーリズの建築なども日本人の風土にマッチしたから根づいたのでしょう。

中村 私のひとつの活動の動きは、ただ過去の文化を知るという意味で、あるいは継続していくという教育ではなくて、むしろ文化創造としての和文化教育という考え方を訴えている。つまり文化というのは、今、生きている私達自身が過去とつながり、同時に文化を未来に向けて創り出して行くという係わり合いが必要です。伝統文化について歌舞伎だとかを知ることはもちろん悪くはないのですが、そういうことを知ると同時に、そのよさとか考え方を自分達の中で色々消化しながら、工夫して新たな文化を創り出して行く。そういう側面を主張しているわけです。そういう意味では、文化は、ただ単なる固有の文化として継承していくという役割をになう人も多いのですが、私達自身が生きる、生活していくという立場からいうと、色々な文化のよさを融合させながら、地域あるいは日本というかわりの中で、新たな文化を何らかの形で作り出せばよい。文化を創るといって何か大げさなこと、非常に大きなことをやらなければ何かそういう声が生み出されないのではないかと思われるわけですが、そうではない。私の例でいえば、鯉のぼりを上げる。伝統的な鯉のぼりを先ほど説明しましたように、文化のシンボルとしての鯉のぼりとしてあげる。そして、世界のこどもの日を作ろうではないかというような主張で上げていけば、そういう思想を通し、日本の文化というものが、日本人でなくて外国の人たちも喜んで、鯉のぼりを色々な国々で作ってもらう。それを掲揚したら、色々な文化の融合とかかわりあう中で、文化を創造していこうというのが重要なことです。今日お話がありました文学と合体しようというのも新しい一つの文化創造の試みなのです。文化というものを多様に生み出していくという、その関わりが今の私自身の生き方の支えになってくると考える次第です。

河内 失礼ですけど、関学の定年は何歳ですか。

中村 関学の定年は 68 歳です。

河内 今度の、第 10 回全国大会の PR をしていただけますか。

中村 最初に紹介しました和文化教育という最初は、「和文化教育研究交流協会」という名称で活動していましたが、今年度からは「和文化教育学会」と、学会という堅苦しい名前になりましたが、第 10 回は、淡路・洲本を会場にして企画しています。淡路は国生みの島である。そこで花開く郷土文化の教育力—これがテーマです。ご存知のように、淡路文化、地域文化としては淡路人形浄瑠璃—そこから色々な日本の文化というものが、まちの

文学の影響を受け各地に行って、人形浄瑠璃を演出していますから、九州から東北まで活動を展開して、今も残っているところがある。淡路の一つの活動が、島というところに限定されず、日本全体にも影響を与えているということが、人形浄瑠璃の活動を通して理解できるわけです。そのような淡路での取り組みを全国的な視野で来年の1月18日を中心に計画しているわけです。内容的には人形浄瑠璃の活動を含めて、それから、だんじり歌ですね。社会教育的な活動を全国的にやっている団体がある。そういった取り組みを含めた大会を企画している。人形浄瑠璃は、三原高校の人形浄瑠璃部の生徒達がオープニングアトラクションとして演じていただくという企画も計画しています。皆さんのなかにも興味をお持ちいただければ、入れなくても参加は自由ですのでご参加いただければ結構です。昨年1月に関学の教育学部でも、こういう大会をやったのです。東日本の大震災を受けて、地域の創造というものが、阪神淡路の被害を受けてそれなりに復興してきた。そういう風な経験、ノウハウ、考え方も含めて、改めて東日本の震災に対して我々はどう活動していくのか、どういう意義があるのか。そういうことも含めて全国大会をやっていますので、ぜひご参加いただければと思います。

河内 プログラムを見てみますと、分科会がいろいろありまして、それなりにいろんな学校で和 문화への取り組みが行なわれつつあるのですね。

中村 それなりではなくて、先ほども申しましたように新指導要領の中では、社会はもちろん理科であろうが、算数であろうが、体育であろうが、各教科に伝統文化に関する領域が入っていますので、全国何処の学校でも教科書で教える限りはやっているのです。ただ、やっているのだけれども、そういう領域の重要性に未だ着目されていない。

河内 以前、神戸市の有馬小学校で、伝統文化を教えられる先生がいないということで、年配の芸者さんが三味線を教えて、それはそれで面白かった。町の中には実はネタや人材が埋もれている。そんな人材を活用してやっていけば面白いものが出来ると思います。

中村 だからそういう風な取り組みが東広島とか、島田市とか地域単位で各学校がすべて一学校一和 문화教育と、モデル校も出ています。学校で難しい学力形成とか、算数の力を伸ばそうとか、そんなテーマを上げたところで地域の人は興味を示さないわけです。学校でこういうことをやりますから、なにを寄贈してくださいとか、邦楽とか、茶道をやりますとか、地域の人達は、そういうことに能力を持っている人が結構います。進んで協力してくれる。学校と地域の連携が、そのような文化を通じて生み出される。地域的な取り組みも出てきている。

河内 我々としては、文楽の源流が西宮市にあるという歴史を大事に活かすというコンセプトで、芸文センターで企画物を公演しています。幸い西日本で最も成功している公立劇場で、喜ばしいことに、古典芸能の公演にもクラシック音楽のときと公演の同じ客が来てくれたりしている。その場所へ行ったら、和洋を問わず、よいものを行っている。場所に信用がついてきて、西宮は文化的な一地域というより、センター的な場になってきています。今日は能×文楽の宣伝と、和 문화教育学会が西宮に本拠を置いていることを知

って頂きたく、そしてこのキャンパスを見て頂きたくて延長しました。たくさんの方に来ていただきまして、ありがとうございました。お礼申し上げます。

ご質問あればどうぞ。

質問者 学校教育で、西洋音楽が和楽を駆逐したとの話ですが、英語を小学校から教えるという考えがあるんですが、そうすると日本語で日本の心を学ぶのと併行していくわけですね。これはどう思われますか。

中村 文科省では、小さい時から、先進国ではほとんど小学校低学年から英語の教育をやっていますので、英語活用の観点からいうと、日本では英語の教育を受けてもなかなかしゃべれない、だから国際的な人材を作るうえから、世界に通用するような言語使用できる人材を作るというのも一つの考えです。そのような考え方に対し、小さい時から外国語を使い分けてきちんと修得できるのか。それなりの生活文化、地域文化、考え方、それぞれの国語の力、そういうものをきちっとベースとして教育してから、中学からやったところで遅くはないのではないかと。こういう2つの考え方があります。私自身は、地域的に重要な一つの価値観、ものの見方、そういうものを小さい時からきちんと教育していくことが重要だと思います。これは政治的な判断、考え方、社会的な要請からいうと、世界的な活動を通して、義務教育を受けながらしゃべれないのはいかなものか。そういう意味で、小学校から英語教育をやる。ただし、小学校での英語教育は、中学校での英語教育は違う。語学を覚えるとか、絵を描くというよりも、聞いたり、踊ったり、感覚を楽しみながら学習して行くという一つの方法です。子どもたちの個々の成長に合わせて、各学校でどうまくカリキュラムの中で調和させながら教育していくかということが課題になってくる。

河内 難しい問題ですね。西宮にお住まいの西田ひかるさんの子育ては英語と関西弁のちゃんぽんだそうです。日本人の語学が苦手なのは千何百年の伝統がありますね。漢字が入って来ても、中国語ではなく日本流に読んできた国民性です。しかも翻訳が凄く発達したので、ほとんど世界の文献が日本語で読めてしまう。翻訳されなければ、やむを得ず言語を読むわけですが。ただ、これから人口が減ってきますので、マーケットが小さくなる。日本だけのマーケットではやっていけない。やむを得ないですね。何かほかにございせんか。一番後ろの方どうぞ。

質問者 和文化ということで「和食」ですね。「和食」はどのような風に考えておられますか。と言いますのは、ちょっと前に関学で食文化研究会というのがありました。「和食」が文化遺産に登録されましたが、偽装問題等があつて、「和食」が忘れ去れようとしています。それについてのご見解をお願いいたします。

中村 和文化と言いますのは衣食住すべての生活規範を含みますので、食という一つのかかりからいえば、当然入ってくるわけですね。世界文化遺産という形で「和食」が世界に広がっていく。その「和食」の中身も日本人の思想性がちゃんとあるわけですね。基本的には素材のよさを生かせる、旬、季節に合ったものを生かせる。バランスよく食べる。健康に良いものとして食事をしていく。そこの考え方というのは、これから色んな文化にも通

じる重要な基本として広がっていくと思いますし、具体的に我々の食生活の中で、いろいろなよさを多くの人達が理解していただくというのは、文化的な発展という意味でも非常に意義があると考えます。

河内 西宮北口駅の構内に国内で始めて日本酒の原酒を売るコーナーが出来て、話題になっております。日本盛です。西宮市は、宮水を護るために石油コンビナートが来るのを撤退させた歴史をもっています。宮水と日本酒の文化は守っていきたい。日本酒で乾杯しようという動きも西宮や伊丹で広がっています。この西宮文学回廊でも「お酒と文学」で取上げたのですが、改めて「宮水と文学」とか「日本酒と文学」でもいいのですが、そういうテーマでやってみたいと思って、実は播半を会場に考えていたのですが——、門戸厄神さんでやらせていただいてもいいと思います。今日は長々とお付き合いいただきましてありがとうございました。

もともと門戸厄神のまちづくり、まちおこしの人達から相談を受けてご相談し、文楽に来ていただいた。「厄神文楽」をやってよかったなと思っています。今日は住職さんもいらっしゃいますので、今日の「厄神文楽」よかったと思われる方は拍手してください。

(拍手)